学習者は「論理的でわかりやすい文」をどう書いたか

伊 豆 原 英 子

1　はじめに

本稿は、初年次教育としての「日本語表現法」の授業で、学習者がその第 1 の目標である「論理的でわかりやすい文」をどのように書いたか、教授上の改善点は何かを学生のレポートを分析することによって明らかにしようとするものである[1)]。

本稿では、学期末に、試験として課したレポート[2)]を分析し、以下の 2 点を明らかにする。第 1 は、主な学習項目を学習者がどう受け止め、どのようなレポートを書いたのか、そこにはどのような問題があり、その原因にはどのようなことが考えられるのかである。第 2 は、学習者のレポートに見られた学習項目以外の問題にはどのようなものがあるかである。

学習者の抱える問題を知ることで、誰もが「論理的でわかりやすい文を書く」ための指導上のヒントを見出したい。

2　論理的でわかりやすい文を書く

2.1 「論理的でわかりやすい文」とは

野矢（2003）は、論理の力はどうすれば身につくだろうと問いかける中で、「論理の力といっても、しばしばそう誤解されているような「思考力」のことではない。（中略）論理の力とはむしろ思考を表現する力、あるいは表現された思考をきちんと読み解く力にほかならない。それは、言葉を自在に扱う力、われわれにとっては日本語の力のひとつなのである。」と述べている（p. 1）。野矢はまた、論理は、数学や、評論、論説に特有なものではなく、「言い

たいことがきっちりあって、それを自分と意見が違うかもしれない他者へ伝えようとするとき、たとえ柔らかで平易な文章であっても、そこに論理が姿を現わす。」と言う（p. 6）。

筆者らが「日本語表現法」で目指したのは、まさに、「思考を表現する力、あるいは表現された思考をきちんと読み解く力」を鍛えることであり、「たとえ平易な文章であっても、自らの意見を他者に伝えようとする」ことの中で、論理の力を鍛えようとするものであった。

「論理的な文」とは、論理的な思考力というものがまずあって、そこから自在に紡ぎだされる文を書き連ねることによってもたらされるものではなく、書くことによって、書く苦しみを経験することによって初めて作られていくものではないだろうか。そこに「論理的でわかりやすい文を書く」ことを指導する意味があるのではないだろうか。その文は、野矢が言うように、むずかしいものである必要はない。平易な文でいいのだ。

2.2 「論理的でわかりやすい文を書く」ための指導

では、論理的でわかりやすい文が書けるようになるためには、具体的に、どのような事柄を指導することが必要なのだろうか。授業では「論理的でわかりやすい文」を書くために必要な事柄として、次のような項目をたてて指導している。①文章全体を序論・本論・結論の3部構成にすること、②序論・本論・結論に盛り込むべき事柄と、そこで必要となる表現、③序論・本論・結論に一貫性をもたせること、④段落の構成のしかた（パラグラフ・ライティングに基づく段落構成）、⑤接続詞や順序表現の効果的な利用、⑥事実と意見を書き分けること、⑦複眼的かつ批判的にものごとを検討すること、⑧引用に関するさまざまな約束事やその表現などである。木下（1998: 5）は、「一つ一つの文とそこまでに書いてあることとの関連がはっきりしていることが論理的な文章の第一条件だと主張したい」と述べているが、先にあげた指導項目が木下の言う条件を基礎としていることは言うまでもない。

授業では、それぞれの項目について練習問題を通して学ぶとともに、5回の課題文（意見文）を課している。意見文を課しているのは、意見文では、あるテーマについての論点や根拠の妥当性を問われるところから、おのずから論理的であることが要求されるからである。5回のうち、4回は学習項目に即したフィードバックを行い、書き直しをさせている。それぞれの課題文での学習項目ひいてはフィードバック項目は以下の通りである。

1回目：文の基本、文章の構成、段落内部の構成
2回目：文の基本、文章の構成、段落内部の構成、接続詞、比較表現
3回目：文の基本、文章の構成、段落内部の構成、接続詞、批判的検討の是非
4回目：文の基本、文章の構成、段落内部の構成、接続詞、資料の用い方と引用のし方

5回目の課題文は、これまでの集大成として書き上げるものであり、試験に代わるものでも

あるため、書き直しはない。

3　分析に用いたレポートについて

ここで用いた資料は、平成23年度の「日本語表現法」科目で得られた5回目の課題文（以下、最終レポートと呼ぶ）である。レポートのテーマは、「コンビニの深夜営業の是非」で、序論では、背景を簡単に説明するとともに、賛成・あるいは反対の立場を明らかにし、その論拠を本論で書くように求めている。賛成か反対（是か非）の立場を、まず明らかにするよう求めているのは、そのほうが論理的に書き進めることを可能にすると考えるからである[3)]。

最終レポートを書く前に、3コマを用いて、次のような授業を行っている。まず、1コマ目で、第14課「意見文を書く⑴」を用い、「冷房28度設定」に賛成する立場のモデル文を読む。ここで、論拠としてデータ（教科書の巻末資料）がどう用いられているかを確認するとともに、モデル文のアウトラインを確認する。次に、2コマ目の第15課「意見文を書く⑵」で、「冷房28度設定」に反対する意見文のアウトラインを同じ巻末資料を用いて作成し、それに基づいて、意見文を書く。この2コマの時間に、引用のし方を合わせて学習する。3コマ目でフィードバックを受けて書き直しをする。

上記の過程を経たうえで、最終レポートのために2コマを取り、まず1コマ目でアウトラインを書く。事前に「コンビニの深夜営業の是非」を考えるための資料（A4，8ページ）[4)]を渡し、そこから反対あるいは賛成の根拠となるデータを得るよう指示している。資料は、賛成・反対どちらの立場に立っても、その根拠が示せるように用意されている。

アウトラインには、序論・本論・結論に書く内容を箇条書きあるいはそれに近い形で必要なデータとともに記入させ、参考文献としてデータを引用した資料名をあげることを求めている。そして、授業の最終日に、アウトラインだけを見て1,000字のレポートを仕上げる。

4　分析と考察

学習者が学習項目の指導をどう受け止め、どのような文を書いたのか、学習項目以外ではどのような問題があるのかを知るために、レポートの成績が下位と判定されたもの5名（以下、学習者をABCDEの記号で示す）と上位と判定されたもの5名（FGHIJの記号で示す）の最終レポートを分析した。

それを見ると、漢字が正確に書けているか、くだけた話し言葉の使用はないか、連用中止が用いられているかといった学習項目は、成績上位者・下位者に差が見られなかった。両者の違

いは、序論・本論・結論に盛り込むべき内容とその表現面に見られた。以下具体例を示して説明する。

4.1　学習項目に関して

ここでは、学習項目について、いくつかの観点から分析する。

1）序論の書き方

序論ではテーマの背景を説明し、（問題提起をし）、自分の主張を明示するよう指導している。最終レポートの場合で言えば、序論で、「コンビニの深夜営業」がなぜ問題なのか、「コンビニの深夜営業」に対して「自分」は賛成・反対どちらの立場を取るのかを書くことを求めている。コンビニの深夜営業の是非を問う問題の発端は環境問題であり、そこから私たちの暮らしのあり方を問うものであった[5)]。したがって、背景知識として、環境問題なり、暮らしのあり方なりに何らかの形で言及することが求められている。しかし、下の例⑴～⑸に見るように、成績下位者は問題の背景として環境問題に言及したものはなく、賛成か反対かを述べたものも二人にとどまっている。それに対して、成績上位者では、4人が環境問題に言及し、全員が是非の立場を明らかにしている（例6～10）。

また、是非の理由は、本論で、論点として2点あるいは3点を取り上げるように指導している。しかしながら、成績下位者3名と上位者1名が序論で、是非の理由をあげている。序論に理由が書かれている以上、本論ではその理由に対する論拠が展開するものと予想されるが、実際には、本論で新たに別の理由も提示され、そのため、序論と本論との間に一貫性がない文になってしまっている。この点については、5）の「序論・本論・結論の一貫性」のところで扱う。

以下、例⑴～⑽は、序論の全文である。

⑴　私はコンビニ深夜営業について、ニュースや新聞などでよく強盗にお金や物を盗まれるという事件を耳にしたり、見たことがあるので反対だ。(A)

⑵　コンビニの24時間営業をすることによって悪影響が生じるのではないだろうか。また、深夜に利用する人はいるのだろうか。(B)

⑶　私たちが日ごろからよく利用するコンビニは、最近ではその多くが24時間営業をしている。夜遅くまで営業している便利さがとても魅力的だと考える。だから私は、深夜営業をしているコンビニについて賛成である。(C)

⑷　コンビニが深夜営業を行うことで、多くの人の助けになっているだろう。(D)

⑸　現代のコンビニは24時間営業がほとんどであるが果たして本当に深夜営業は必要あるの

か、考えてみたいと思う。(E)

⑹　最近の日本ではCO_2削減が叫ばれており、コンビニの24時間営業を見直し、23時から5時までを閉店にと求める声もある。しかし私は24時間営業に賛成である。(F)

⑺　今日、環境保全のために電力消費の削減を求める動きがあるなかで、コンビニの深夜営業を見なおすことを求める声が増している。私は、コンビニの24時間営業に賛成であるが、コンビニが深夜帯に営業することによってどのようなメリットがあるのだろうか。また、環境に及ぼす影響はどの程度のものなのだろうか。(G)

⑻　今現在、環境問題や犯罪に関する問題が頻繁に取りあげられているが、私は、コンビニ深夜営業に賛成である。(H)

⑼　昨今、コンビニの深夜営業の是非について議論されることがある。私としてはコンビニの深夜営業は必要なものだと考えており、賛成である。以下に詳しく述べたい。(I)

⑽　私はコンビニの深夜営業に賛成である。なぜなら、地球温暖化を防ぐためにコンビニの営業時間を短くすることよりも、深夜営業をして地域犯罪に目を光らせるほうが重要だと考えるからだ。(J)

序論でコンビニの深夜営業が問題になった背景に触れること、また、賛成・反対を明示することの2点を指導しているにも関わらず、上で見たように、下位者では、それができないものがいる。

テーマの背景への言及については、これまでにコンビニの深夜営業を巡る背景知識をどれほどもっていたかということや、用意した資料の全体に目を通し、問題の所在を読みとる力があるかどうかが関わっていると思われる。また、是非の明示については、まず自分の主張を明らかにするという論の進め方に抵抗があるか、あるいは慣れていないことが原因ではないかと思われる。

さらに、序論で理由を書いているのは、第1回目の授業で書かせる課題文に、第1段落に理由を書くタイプのものがよく見受けられることから判断すると、高校での小論指導で学んだ書き方を引きずっているのかもしれない。

序論で主張を明らかにすることおよび主張を支える理由を書かないことは（これらは、本論と結論との一貫性を保証するうえで大切なポイントであるが)、指導を徹底することで改善が図れるのではないかと思う。しかし、テーマの背景を説明する力をつけることは簡単にできることではない。

2）中心文の書き方

授業では一貫して、段落を、段落主題が書かれた文（中心文）と中心文を支えるいくつかの

文（支持文）から構成するように指導している[6)]。中心文の位置は段落の最初あるいは最後が一般的であろうが、段落の最初が望ましいという指導をしている。最終レポートを書くためのアウトライン作りでも、まず、是非の論点（ここでは理由）という形で中心文を書き、次にその説明としての支持文を書くように指導している。

しかし、ここで取り上げた10名の中にも、中心文を段落の最初に置く頭括型ではなく、段落の最後に置く尾括型を取るものが3名（下位に1名、上位に2名）いた。まず、根拠を書き、それを「だから」でまとめる尾括型は学習者にとって慣れ親しんだ書き方であり、書きやすいのであろう。中心文をまず書き、次に支持文を書くことはそう簡単に習得できることではないようだ[7, 8)]。

それでは、学習者が書いた中心文にはどのような問題があるかを見てみよう。なお、中心文を段落の初めに書くように指導していることから、ここでは頭括型による7名の中心文を用いて分析を進める。7名全員が、理由（論点＝中心文）とその説明（根拠＝支持文）で段落を構成することは理解している。そして理由として3点をあげ、その説明となる支持文を書いている。（以下の例⑾～㉙で、①②③の番号が付されているのは、それぞれの学習者があげた中心文である）

しかし、同じように3点をあげていても、下位者の中心文にはいくつか問題が見られる。まず、例⑾の②③であるが、中心文に重なりがある。つまり、③は②を支持する文であり、中心文にはなりえない。次に、例⑿の①②③であるが、反対あるいは賛成の理由が入り混じって、中心文からは、賛成なのか反対なのかが分かりにくい。学習者BもEも、序論で是非の態度を明らかにしていない。そのことが中心文の「ゆれ」になって表れているのではないだろうか。

⑾　②次に、24時間営業店舗を利用する人はあまりいないのではないだろうか。

③最後に、24時間営業店舗の深夜利用頻度は「ほとんど利用しない」「時々利用する」と答えた人は全体の9割にものぼっている。(B)

⑿　①まず第一に、深夜営業に賛成している人の中で深夜でもコンビニを多く利用していると考えている人がいるのではないか。

②次に深夜23時5時の間に働く人がいるかということについてだ。

③また深夜営業を狙う強盗も増えている。(E)

また、例⒀の①、例⒁の②は、中心文だけでは何を述べようとしているのかがはっきりせず、そのため、一見同じ内容を取りあげているのかと思われるものである。実際は、例⒀の①は、コンビニの深夜営業が青少年に悪影響を与えることを述べようとしているのであり、例⒁の②は、防犯面での貢献について述べようとしているのである。

⒀　①多くの人は深夜営業小売店について心配なことがある。

②コンビニ強盗は防犯態勢が手薄な深夜に起こることが多い。(A)

⒁ ②次に深夜営業のコンビニの貢献がある。

③また、コンビニでは自然災害に対する貢献の実績もある。(C)

これらの例では、中心文が段落の方向性あるいは見取り図を示すものになっていない。段落主題が述べられているとは言えず、中心文としては情報が不十分である。

次に、上位者と下位者が、同じ話題に関してどのように中心文を書いているかを見てみよう。

ア)〈防犯面について〉

⒂ ②次に深夜営業のコンビニの貢献がある。(C)

⒃ ②次に、コンビニの24時間営業の利点として、地域犯罪に目を光らせているということがある。(F)

⒄ ②第二に、現在の日本は、様々な場所で女性が犯罪の対象となる場合が多く、特に深夜の犯罪においては、24時間営業のコンビニは防犯対策につながるのではないだろうか。(H)

⒅ ②第二に、コンビニは全国各地に4万2000店ある。それだけあれば、地域の防犯効果に大きな期待が持てる。(I)

イ)〈CO_2の排出について〉

⒆ ③コンビニの深夜営業は環境問題に悪影響である。(A)

⒇ ①私がコンビニの24時間営業に賛成の理由としてまずあげるのが、たとえコンビニの営業時間を24時間から少なくしたとしても、CO_2排出量の大きな削減にはつながらないというものがある。(F)

ウ)〈利用者数について〉

㉑ ③最後に、24時間営業店舗の深夜利用頻度は「ほとんど利用しない」「時々利用する」と答えた人は全体の9割にものぼっている。(B)

㉒ ①コンビニの深夜営業の賛成の一つの理由として、深夜営業ということの必要性がある。(C)

㉓ ①第一に、24時間営業店舗を利用する人は少なくなく、深夜営業を自粛してしまうと、おそらく不自由を感じる人もいるはずである。(H)

例㉑では、賛否の理由ではなく、賛否の根拠となるデータそのものが中心文になっている。

エ)〈災害時の貢献について〉

㉔ ③また、コンビニでは自然災害に対する貢献の実績もある。(C)

㉕ ③最後に、24時間営業しているということは、緊急の事態に迅速に対応できるのである。(F)

(26)　③第三に、大震災などの災害において、24時間営業のコンビニは国に役立つことが多くあるのではないか。(H)

(27)　③第三に、24時間営業しているということは、常に食品を供給する体勢が整っていることを意味する。それはつまり、万一の大災害にも迅速に対応、そして支援が行えるということを意味しているのである。(I)

オ)〈雇用の確保について〉

(28)　②次に深夜23時5時の間に働く人がいるかということについてだ。(E)

(29)　①まず第一に、コンビニは多くの雇用を生み出しており、深夜営業を行うことは、雇用拡大に効果があると言える。(I)

中心文は、それを読んだだけでその段落で扱う内容が伝えられるもの、あるいは予測できるものである必要がある。しかしながら、下位者の中心文は、上位者のそれと比べると、段落主題が明確ではなく、そこで何が言いたいかが伝えきれていない。それに対して、上位者の中心文は段落主題がわかりやすく提示されている。このことは、つまり、支持文として取り上げる内容が明確に理解できているかいないかの差が表れているのであろう。

中心文には「賛否の理由を書く」のだということだけでなく、「段落で言いたいことは何かがわかるように書く」ことを指導する必要があろう。

3）支持文の書き方（引用のあり方）

支持文をどう書くかは、資料の「引用」と深くかかわっている問題である。支持文は、中心文（ここでは是非の理由）を読んだ人が、その理由として納得できる説明を書くように指導している。ここでは、同じ理由に対する説明が下位者と上位者でどのように記述されているかを示す。

ア)〈CO_2の排出について〉

(30)　コンビニの深夜営業は環境問題に悪影響である。渡辺未英（2008）によると、コンビニの深夜営業は地球温暖化の原因となっているCO_2の排出を増大させており、環境問題の点から考えて、検討すべきである。現在、私達が暮らしている地球で、一番の環境問題と言ったら、CO_2の排出といっても過言ではない。CO_2の排出を少しでも減らしていくために、コンビニの深夜営業を止めるべきである。これ以上地球温暖化を進行させてしまうと動物や森林の生態系の循環が悪くなってしまう。悪循環がつながり、次には私達人類の存続の危機という可能性もなくはない。(A)

(31)　私がコンビニの24時間営業に賛成の理由としてまずあげるのが、たとえコンビニの営業時間を24時間から少なくしたとしても、CO_2排出量の大きな削減にはつながらないというも

のがある。月刊コンビニ編集部（2008）によれば、コンビニを16時間営業にした場合でも、深夜閉店時に冷凍冷蔵庫の稼働を止めることはできず、冬の期間の空調関係も同様に止めることができないのである。看板、店内照明は開・閉店前後の１時間は店内営業のため、実質６時間の停止であり、これで５％から６％の削減となる。そして物流のことを考えると、深夜帯の商品配送から昼間に変わるので渋滞により２％増となってしまう。これを合計するとCO_2の削減は４％程度となり、コンビニの深夜営業をやめたとしてもCO_2削減に大きな効果はないと言える。(F)

例㉚では、コンビニが深夜営業することによるCO_2排出量の、CO_2排出量全体に占める割合がどの程度のものであるかに言及されることなく、つまりデータで環境への悪影響を語ることなく、コンビニの深夜営業が「人類の存続の危機という可能性」にまで問題を広げられている。観念化した議論の進め方と言えるだろう。それに対して、Ｆでは、CO_2の排出量は４％削減されるだけだというデータが示されて、説得力のあるものとなっている。

イ）〈防犯について〉

㉜「月刊コンビニ編集部」（2008）によると、コンビニが地域犯罪に目を光らせて、なにかあったときの駆け込み等への対応を行っている。特に女性・子供の駆け込みが多い。女性が深夜にコンビニへ駆け込む割合は、2007年３月１日から２月末までの間で43.5％と最も多い。ストーカーや連れ去りなど女性や子どもを狙った犯罪は今も多く発生している。コンビニが深夜営業を行っていることで、このような犯罪から多くの人たちを助け、守っていると言える。(D)

㉝　次に、コンビニの24時間営業の利点として、地域犯罪に目を光らせているということがある。月刊コンビニ編集部（2008）によれば、2007年３月１日から2008年２月末の間に、女性の駆け込みが１万571件、子どもの駆け込みが5511件ある。そのうち、深夜（23:00～5:00）では女性は5076件、子どもは426件となっており、女性の駆け込みを見てみると深夜によるものが最も多く、全体の43.5％がこの時間帯に来ているのだ。このように、コンビニへ助けを求める人も多く、全国の交番・駐在所が減少する中、コンビニの役割は大きいのである。(F)

ＦとＤでは同じデータを用いているが、Ｆでは論点の根拠がデータによってきちんと示されているのに対して、Ｄではデータの不正確な引用（2007年３月１日から２月末まで）があり、また、43.5％がどういう数字なのかの説明が明確ではない。また、Ｄでは、「ストーカーや連れ去りなど女性や子どもを狙った犯罪は今も多く発生している。」という、データの裏付けのない一文もあり、データに語らせているＦとの違いが見られる。

ウ）〈雇用について〉

㉞　次に深夜23時～５時の間に働く人がいるかということについてだ。平成20年６月30日付の朝日新聞によると、人手不足などからコンビニのオーナーは「24時間営業をやめたい」という声があるという記事が載っている。実際、私自身も高校生のときからコンビニでのアルバイトをしているが深夜に勤務ができる人はやはりごくわずかであり、過酷な仕事により体調をくずしてしまう人も少なくはなかったような気がする。(E)

㉟　まず第一に、コンビニは多くの雇用を生み出しており、深夜営業を行うことは、雇用拡大に効果があると言える。『月刊コンビニ』編集部（2008）によると、約４万2000店で約100万人が直接従事しており、配送や弁当の製造等の間接人員を含め、少なくとも130万人が従事しているとある。130万人が多かれ少なかれ、雇用拡大に一役買っているのは事実だといえる。(I)

Ｅの文章が、「働く人がいるかどうか」について、コンビニのオーナーの声や自分自身の体験から根拠を提出しているため、コンビニ業界として働き手が本当に不足しているのかが不明なのに対し、Ｉの文章では、深夜営業に従事する人員という客観的な数字で雇用に役立つことを示している。

例㉚㉜㉞に見るように、下位者は共通して、論拠として自分がこれまで見聞きした情報を利用している。用意されたデータをきちんと読み取ることへの抵抗感あるいは読解力不足から、データより自分の見聞を優先させているのではないかと思われる。

理由の裏付けとしてデータをどう利用するかは、学習者個々人に任されている。授業ではデータをどう読みとるかの指導まではしていない。そのため、同じ資料を用いていても読解力の差が表れるのであろう。データをどう読むかまでは時間的に指導できる範囲を超えているのが実情である。

４）序論と本論、序論と結論の一貫性

授業では、序論・本論・結論に齟齬がないか確認することを求めている。

ここで取り上げるのは、序論と本論、序論と結論の一貫性という視点から、齟齬が生じた例である。以下の３つの例は、序論で賛成・反対の理由を示しているため、本論あるいは結論との間に一貫性がないと感じさせられるレポートになっているものである。序論では、全体の方向性を示すにとどめ、本論で論を立てて論証していく書き方ができれば、このような齟齬は少なくなるのではないか。

Ａは序論で、「コンビニ深夜営業について、ニュースや新聞などでよく強盗にお金や物を盗まれるという事件を耳にしたり、見たことがあるので反対だ」と反対の理由をあげている。そこで、このレポートを読むものとしては、「ニュースや新聞などでよく強盗にお金や物を盗ま

れるという事件を耳にしたり、見たことがある」ことの詳細が根拠として述べられることを期待する。しかし、本論では反対の根拠として、コンビニ強盗が深夜に多く起こることだけでなく、「コンビニの深夜営業が環境問題に悪影響である」こともあげられている。

Cもまた、序論で、「夜遅くまで営業している便利さがとても魅力的だ」から、深夜営業に賛成だと述べているが、本論では、コンビニが女性の駆け込みや自然災害が起きたときなどの「セーフティネットとしての役割」を果たしていること、つまりコンビニの「社会貢献」をも賛成の論拠としてあげている。

序論と結論が一致していないものもある。Cは、序論で、「夜遅くまで営業している便利さがとても魅力的だ」から、深夜営業に賛成だと述べているが、結論では、便利さの他に、「社会的貢献にも役立っている」ことを賛成の理由としてまとめている。本論と結論との一貫性は保たれているが、ここでも問題は序論で理由を書いたことから生じている。

5）順序表現の使用

「まず、次に、そして」などの順序を表す表現は、そこから新たな内容が始まることを示すものであり、それによって文を読みやすく、理解しやすいものにする。接続詞や順序表現を効果的に用いることは、論理的でわかりやすい文を書くうえで大切な項目であり、授業でも1コマをとって指導している。

さて、本論で論点をあげる際に、順序表現が使われているかどうかを見ると、下位者のうち、BCEには使われているが、ADには使われていない。一方上位者を見ると、全員が順序表現を効果的に用いている。順序表現の使用は、学生の注意を喚起することで十分に目的を達せられる項目だと思われる。

6）引用の表現

資料を引用する際の方法や表現についても、授業の中で指導し、練習としていくつかの文を書かせている。しかし、引用したデータを一つの文の中にどう取り入れて書いていくかはむずかしいことのようだ。出典の書き方、データの取り入れ方など、適切に書けたものは下位者にはなく、上位者でも不十分なものがいる。例を見てみよう。

(36) 2008年6月30日付の朝日新聞によると、24時間営業店舗の深夜利用頻度は、「ほとんど利用しない」「時々利用する」と答えた人は全体の9割にものぼっている。(B)

(37) 平成20年6月30日付の朝日新聞でコンビニ、配送、弁当工場などで働く人は同協会推定で約130万人とある。(D)

(38) 平成20年6月30日付朝日新聞によると、人手不足などからコンビニのオーナーは「24時間営業をやめたい」という声があるという記事が載っている。(E)

(39)　YOMIURI ONLINE では、今年に入って発生したコンビニ強盗95件のうち90件が午後10時から午前7時までの時間に集中していた。(E)

引用方法やその表現、データをどのように自分の文章に取り入れてくかなどについては、フィードバックを与え、何度も書き直すことで慣れさせることが必要であろうが、時間的に不可能である。知的所有権の確保と出典にアクセスが可能であることという引用の理念を理解させることが「日本語表現法」の授業でできる精一杯のことなのかもしれない。

4.2　学習項目以外に関して

ここでは、学習項目として特に取りあげてはいないが、わかりやすい文を書くうえでの基本ともいえる問題について何点かを取り上げる。ここで扱うのは、誤用や冗長な表現といった言葉の運用の問題である。ここでの問題はそのほとんどが下位者に見られたものであり、これまでの言語経験が如実に現れていると思われる。

1）文法上の問題

①名詞化

(40)　明るさで眠れないや→明るさで眠れないことや（B）

助詞「や」に前接するのは名詞であって、用言が前接することはない。ここでは「眠れない」を「眠れないこと」と名詞化する必要がある。

(41)　それらはすべてコンビニの深夜営業による悪影響なことだとは言えないか。→悪影響だと言えないか。(E)

悪影響は名詞なので、「こと」を用いて名詞化する必要はない。

(42)　深夜時間帯の営業を見直すことを求める声が増している（G）→深夜時間帯の営業の見直しを求める……

助詞「の」の連続と「を」の連続のどちらが好ましいかという問題であるが、簡潔性を求めるのであれば、「見直し」と名詞化するほうが望ましいだろう。

②助詞の誤用

成績上位者には見られず、下位者に見られたものとして、助詞の誤用がある。

(43)　24時間営業店舗の深夜利用する人はほとんどいないため（B）→24時間営業の店舗を深夜に利用する人はほとんどいないため

次の2例は、格助詞「が」の使用に違和感があるものである。

(44)　コンビニが24時間営業だから、食料や飲み物が充実している。(D)

(45)　月刊コンビニ編集部（2008）によると、コンビニが地域犯罪に目を光らせて、何かあった

ときの駆け込み等への対応を行っている。(D)

2）表現力の問題

ア）連語知識や表現力不足

ここで取り上げるのは、連語知識や表現力が不足しているものである。

(46) 犯行している→罪を犯す　など（A）

(47) 環境問題に悪影響である→環境問題に悪影響を及ぼす／与える（A）

(48) 社会的貢献にも役立っている→社会に貢献できる（C）

(49) 全体の5.9％にしか満たなかった→全体の5.9％に満たなかった（E）

(50) 前文でも述べたように→上で述べたように（E）

イ）冗長さ

ここで取り上げるのは、言葉の使用が冗長である例である。下位者だけでなく、中位者・上位者にも見られたものに「～について」の使用がある。「コンビニの深夜営業について賛成である」のように用いられるのだが、この「ついて」は不用であろう。また、「賛成であると考える」のように書く学習者も比較的多い。「賛成である」だけでよい。

(51) 深夜営業ということの必要性がある→深夜営業の必要性がある（C）

深夜営業はよく知られている言葉であるから、「ということ」と、ことさら取り上げる必要はない。

(52) コンビニの深夜営業の賛成の一つの理由として→コンビニの深夜営業に賛成する一つの理由として（C）

(53) 深夜営業をすることによっての人手不足が（E）→深夜営業による人手不足が

(54) コンビニの24時間営業をすることによって（B）→コンビニの24時間営業によって

これら、指導項目以外の問題は、「論理性」というより「わかりやすさ」にかかわる問題である。

5　おわりに

以上、最終レポートの成績上位者と下位者のレポートを比較する中で、学習項目がどう受け止められ、学習者はどう書き、そこにはどのような問題があったか、学習項目以外にどのような問題があったかを見てきた。

15回の授業で、成績にかかわらず、できたことは表記上のさまざまな約束事、文体いわゆる丁寧体を使わずに「だ・である」で文を終わること、話しことばに特徴的な表現を用いない

こと、全体を大きく3部構成にすること、段落を中心文＋支持文の構成にすること、順序表現を効果的に用いることなどである。これらは比較的指導しやすく、また、指導の効果が測りやすいものである。ちなみに、最終レポートで丁寧体を使ったものは、19名のうち1名で、1文の中で、だった。話しことば的表現は、1人に、「なので」が使われただけであった。

文章の全体構成、段落構成のし方という「型」の習得は、学習者の日本語力がどのようなものであれ、論理的でわかりやすい文を書く第1歩であろう。構成を明確にし、それぞれの段落に何が書かれるべきかを把握することで、そこに盛り込むべき事柄が整理されるからである。「型」があることで、何が十分で何が不十分かが見えてくる。その意味でいえば、論理的でわかりやすい文を書く第1歩に気づかせることはできたと言えるだろう。

とはいえ、「そこに盛り込むべき事柄」を内実のあるものにする指導は、以上見てきたことからもわかるようにむずかしい。15回の授業では時間的に不十分な指導しかできず、注意を喚起するにとどまらざるを得なかった項目もいくつかある。

以上の分析で明らかになった、下位者（引用に関しては上位者も）のレポートに見られた問題に対して指導が可能な点と、指導がむずかしい点をまとめると以下のようになる。

まず、指導ができると思われる点は、①序論で主張を述べること、②序論では主張を支える理由を書かないこと、③中心文は、支持文がなくても段落主題がわかるように書くこと、④順序表現、⑤引用表現である。

次に指導がむずかしい点は、①序論でテーマの背景説明を「簡潔に要を得て」書くこと、②指導可能な点と重なるが、中心文を支持文がなくても段落主題がわかるように書くこと、③資料を読み、必要なデータを引用して裏付けをすること、である。引用の方法については、高等学校までの国語教育でも、取り扱われることになっているという（島田2012: 11～13）が、学生たちにとっては、新しく学ぶことであるようだ。引用表現については、練習とフィードバックを通して表現そのもの（～によると……だという、のような）は学ぶことができる。しかし、資料をきちんと読み、必要なデータを引用して裏付けをすることについては、その必要性は指導できても、データをどう読み、どこをどう自分の文章に取り込んでいくかは、授業内で指導することは、時間的にむずかしい。

④授業での指導項目以外の、基礎的・基本的な日本語力といったものについては、授業では取り立てて扱うことはできない。これは、この授業に臨む以前の学習者の言語環境、読書経験がものを言う分野であり、日本語力の根幹をなしている項目と言っていいだろう。

以上あげてきた指導がむずかしい点については、大学生にとって必要な学習項目であることから、むずかしい、時間がないと言って、手をこまぬいているわけにはいかない。まずは、「中心文」に「何をどう書くか」の指導の徹底を次の課題としたい。

注

1）科目名は「日本語コミュニケーションⅠ」で、総合政策学部1年生春学期の必修科目である。科目の内容や学習者の問題については、伊豆原（2007、2010）で報告した。教科書は『日本語表現法』（非売品）であり、執筆者は筆者を含めた8名である。教科書は15課から構成されるが、授業で全部の課を扱っているわけではない。

2）2011年度春学期に得られたレポートで、筆者が担当した学生は19名であった。

3）村山（2006: 10）は、「論理的に考えるとは、全体の方針を決めて、筋道を立てて考えることだと思っていただければよい。」と述べ、また、入部（1998: 16）は、「論理的な作文では、自分が正しいと判断した結論が既に存在していて、結論を出発点に、過不足なくまた、順序良くそれに至るまでの筋道を説く必要がある。」と述べている。

4）資料は以下のものを用いた。

① 内閣府大臣官房政府広報室（2005）「小売店舗等に関する世論調査」

② http://www8.cao.go.jp/survey/h17-kouri/index.html

③ 内閣府大臣官房政府広報室（2007）「地球温暖化対策に関する世論調査」

④ 「深夜規制論広がる」朝日新聞平成20年6月30日付

⑤ http://www8.cao.go.jp/survey/h19-globalwarming/images/z10.gif

⑥ YOMIURI ONLINE 「コンビニ強盗　昨年の倍　愛知県警　年末へ警戒」

⑦ http://chubu.yomiuri,co.jp/news-kan/kano91202-1.htm

⑧ 『月刊コンビニ』2008年8月号 「特集24時間営業自粛要請の是非」(株)商業界

5）東北大震災を境に、コンビニの役割は上記の資料を得た時期とは変化している。しかし、資料をどう扱ってレポートを書くかを指導するという点では、その変化を取り入れる必要がないという判断をした。

6）このような段落構成はいわゆる「パラグラフ・ライティング」と言われるものである。本稿では、パラグラフ・ライティングでいうトピック・センテンスを中心文、サポーティング・センテンスを支持文としている。

7）木下（1982）もまた、「トピック・センテンスを最初に書くことを原則とすべきだと考える。しかし、この原則を忠実に守りぬくことはむずかしい」と述べている。

また、田中（2007: 14〜15）は、「生徒たちにとって、「頭括式」で書くことは困難な作業である。特に長い分量の書けない生徒に、「頭括式」を推奨すると、ますます書けなくなる。結論を書いた時点で思考停止してしまい、その後の根拠（事例）の「配列法」が分からなくなるのである。」と述べている。考えさせられる文である。

8）ここでその3名の中心文を示す。学生にとって尾括型は書きやすいのであろうか。

(55) ①コンビニが深夜営業を行っていることで、このような犯罪から多くの人たちを助け、守っていると言える。

②コンビニが深夜営業を止めると、再就職に多くの人が苦労するだろう。

③コンビニが深夜営業だから、（災害時にも）食料や飲み物が充実している。(D)

(56) ①まず一つ目として、深夜帯に営業することのメリットであるが、（データにより説明）。<u>このようにコンビニを深夜でも営業させておくことで、安心・安全な生活拠点ができると言える</u>。

（下線部が中心文、以下同様）

②次に二つ目として、エネルギー消費の削減についてであるが（データにより説明）。このことから、深夜時間帯の営業を見なおさなくても、エネルギー消費の削減は可能であることが分かる。

③最後に、深夜帯営業においてのCO_2排出量であるが、（データにより説明）。つまり、コンビニの深夜帯の営業を廃止することにしても、CO_2削減量はとてもわずかであるため、環境保全への大きな貢献は見込めないと言える。(G)

(57) ①（データにより説明）。このことから、地球温暖化対策のためにコンビニの営業時間を短くする意義はあまりないと言える。

②また、（データにより説明）。このことを考えれば、コンビニの深夜営業が地域住民の安全に一役買っていることが理解できるだろう。

③そして、（データにより説明）。不況と言われている現在、0.1％にも満たないCO_2排出量削減効果を得るよりも、雇用が減ることのほうが重大なことのように思う。(J)

引用・参考文献

1）伊豆原英子（2007）「日本語表現法」教育をめぐる問題点と課題『愛知学院大学教養部紀要』第55巻第1号

2）伊豆原英子（2010）「日本語表現法」教育をめぐる問題点と課題（2）『愛知学院大学教養部紀要』第58巻第1号

3）野矢茂樹（2003）『論理トレーニング101題』産業図書

4）木下是雄（1982）『理科系の作文技術』中公新書

5）村山涼一（2006）『論理的に考える技術』サイエンス・アイ新書

6）入部明子（1998）「国際化時代に通用する論理的な文章の書き方」『日本語学』1998年2月号　pp. 14–21

7）木下是雄（1998）「論理的な文章とは」『日本語学』1998年2月号　pp. 4–13

8）田中宏幸（2007）「A4・1枚（1000字程度）における文章構成」『日本語学』2007年5月号　pp. 14–15

9）島田康行（2012）『「書ける」大学生に育てる』大修館書店